

## シラバスにみる日本の大学翻訳教育の現状 —「シラバス・データベース」の構築と分析—

茨田 英智  
(青山学院大学)

### 1. はじめに

本稿は翻訳教育調査プロジェクトの一環として、ウェブ上に公開されている 108 大学 395 科目のシラバス（講義概要）を分析し、アンケート調査の分析結果に現れない側面を明らかにすることを目的とする。

調査概要に述べられているように、アンケート調査の対象科目を絞り込む際にウェブ上で公開されている翻訳関連科目の講義要綱・シラバス等<sup>1)</sup>を並行して収集し、独自のシラバス・データベース（DB）を構築した。シラバスから得られる情報は多岐にわたっており、授業内容を示すための項目を数多く含む。一般的な内容としては「設置学部学科」、「科目名」、「受講対象学年」、「開講学期」、「単位数」、「授業形式」、「教室情報」、「講師情報」、「授業の概要」、「毎回の授業計画」、「授業の目標」、「成績評価方法」、「教科書・参考書」などがある。シラバスは大学によって形式が異なるため項目にはバラつきがあり、また毎週の授業計画などは受講生の反応を見て柔軟に変えていく場合も多いと思われる。しかしながら、担当者がどのような「狙い・目標」で開講し、どのような「方法・課題」を用いてそれを達成しようとしているのかを結びつけることは、翻訳教育の実態を調べるにあたって重要な意味を持つ。

### 2. シラバスを用いた授業分析

近年の情報技術の急速な普及と機能の高度化に伴い、シラバスを電子化しウェブ上で一般公開（または学内限定公開）する大学が非常に多くなっている。井田ら（2005）が国立大学 350 学部をランダムに選び調査したところ、一般に公開している学部が約 6 割、学内限定で公開しているところも含めれば約 7 割に達した。しかし、Web 上に公開されているシラバスの URL 情報を収集・整理し検索機能を備えた一般向けポータルサイトは存在しているが<sup>2)</sup>、これらシラバスを大学横断的に収集・検証し、大学の授業を論じている研究は高等教育研究の分野においても極めて少ない。前述した井田らのグループが実施した、キーワード抽出による特定の学部間のシラバス DB 構築から教育課程を分析した一連の研究を除けば、奈良（1997）などわずかに見られるだけである。その理由として、奈良（ibid.）は以下のように述べている。

授業科目の実態調査には質問紙法が一般的である。[...]これに対して各校で発行しているシラバス・講義要綱の記載事項を調べることによっても授業科目の実態を調べることが出来る。[...]この方法は質問紙法に比べて回収率が極めて高いとともに、当該科目に対して消極的なところの資料も入手することが出来る利点がある。反面、資料の入手・分析に関して質問紙法よりも多くの労力を必要とする。

前述のようにインターネットを介してのシラバスの入手が過半数を超える大学で出来るようになった現在では、奈良の懸念は一部において解消したといえる。その反面、染谷ら(2005)による通訳教育調査の際も問題になったが、各大学で公開しているシラバスの記載内容の質・量や書式フォーマットや項目順序が非統一であるために、データベースの構築に多大な負担がかかるようになった。本プロジェクトにおいても、翻訳関連科目という比較的限られた数ではあったが、様々なデータ形式によって公開されており、手間がかかったことは確かである。

筆者の調査結果から、ウェブ上のシラバスの公開形態は、次の3種類に大別されることが明らかとなった。

1. 学部学科ごとの授業科目のリストのページ(または時間割のページ)があり、そこから授業ごとのシラバスページへリンクされているもの。
2. 大学または学部ごとにシラバスの検索ページがあり、そこで学年、学科、授業名、キーワードなどを入力することでシラバスを表示させるもの。
3. 学部学科ごとにシラバスが表形式で1ページにまとめられているもの。

なお、それぞれのファイル形式についても、html形式、pdf形式、word形式など様々であった。

### 3. シラバス・データベースの概要

シラバスの内容や形式は各大学で統一が取れていない。そこで本プロジェクトにおいて構築したDBでは、シラバスの内容を項目ごとに分割し、DB側で設定した11項目(図1下部参照)に当てはまる部分に入力・登録した。

DBはインターネット掲示板などと同じCGIというシステムを用いて、専用の登録画面でシラバス情報を登録した後、それぞれの項目ごとにキーワード検索で条件に一致する科目を抽出できる。たとえば、「大学院」で開講されている授業で「翻訳論」を専門にしている教員が担当している授業を検索した場合は、図2・図3のように表示される。

図 1. シラバス・データベースへの情報登録

1.大学名 3.教員名 4.科目名 5.大学住所 6.講義概要 7.教員勤務形態 8.教科書・参考文献 9.成績評価法 11.教員の専門分野 (及びデータ整理用番号)

図 2. 授業検索条件の設定

図 3. 2 の検索結果

全データ(553件)中、【科目設置学部】に「研究科」を含むもの(89件)且つ【教員の専門分野】に「翻訳論」を含むもの(18件)を登録順表示

[No.1] 大学(725)	
科目設置学部	東京文化コミュニケーション学 研究科
科目名	通訳翻訳文化論
教員名	高橋 文子 (専任教員)
教員の専門分野	通訳・翻訳論 英語教育論 異文化コミュニケーション論
講義概要	通訳及び翻訳が文化という視点から考察する。通訳者・翻訳者とはなるものとして言語を機械的に変換するのではない、言語が通じて立つ文化的背景をどのような観点から、どのような観点から、通訳者・翻訳者にとって通訳とはどのような活動であるのかを考察する。通訳及び翻訳は単に言語の問題として理解されておらず、通訳者・翻訳者は個々の異なる文化的背景を有し、それを通訳活動の一環として見直し、個々の事例を中心に考察する。

シラバス・データベースの各項目を詳細に検討すれば、それぞれの科目で設定している目標、授業の手法、講義で扱う翻訳素材のジャンル、翻訳演習の教材や参考図書、専任教員と非常勤講師の割合、担当講師の専門分野、成績評価の方法・基準など様々な情報を引き出し、それらを関連付けて分析したり、学部と大学院を別個に分析することも可能であるが、今回は講義の内容のみを分析することとし、その他の部分に関しては機会があれば稿を改めて報告したい。

#### 4. シラバスの分析

##### 4.1 全体の概要

表1は全395科目の概要である。総数がプロジェクト発足当初の想定より大幅に上回り、その内容も非常に多岐に渡っていることが収集時に判明したため、本研究では杉谷(2005)を参考にして、それぞれの内容・特性をもとに3形態22分類への類型化を試みた。この分類に従えば、全体の3分の2(263科目)が実技タイプの授業だが、翻訳を学術面から講義していくタイプ(104科目)や、カリキュラムの中核を担う専門演習・ゼミナール(28科目)も少なからず開講されている。この傾向はアンケート調査の集計結果とも一致する。

表1. 授業科目の類型

授業形態	講義内容による分類	科目名称の例示	科目数
学術・講義型 27%	1. 概論・概説	「翻訳概説」「日英翻訳言語文化特別研究」	20
	2. 翻訳文学・文化論/比較文化・比較文学論	「現代翻訳論」「日本文学講義」	29
	3. 翻訳比較・翻訳批評	「翻訳法」「文芸研究」	7
	4. 翻訳研究(Translation Studies)全般	「翻訳論」「Translation Studies 入門」	14
	5. 翻訳理論	「翻訳理論」「トランスレーション言説分析論」	21
	6. 異文化コミュニケーションとしての翻訳論	「異文化コミュニケーション基礎演習」	7
	7. その他	「機械翻訳」「英語聖書翻訳特別研究」	6
実技・演習型 66%	8. 日本語⇄英語	「翻訳の世界」「Translation for Interpreters」	16
	9. 英語→日本語(総合・時事)	「英語翻訳入門」「翻訳演習」	79
	10. 英語→日本語(文芸)	「翻訳セミナー」「翻訳文化論演習」	48
	11. 日本語→英語(文芸・総合)	「日本文学英訳」「クリエイティブ・ライティング」	18
	12. 日本語→英語(時事)	「翻訳技法」「翻訳入門」	8
	13. メディア翻訳(映像・マンガ・歌詞)	「訳詩の世界」「映像翻訳の理解」「字幕翻訳技術」	23
	14. 通訳翻訳演習(日英・英日)	「通訳・翻訳入門」「外国語運用実習」	17
	15. 通訳翻訳演習(その他[中仏独露])	「フランス語通訳・翻訳実習」	5
	16. 日本語⇄韓国語	「アジア文化論演習」	5
	17. 日本語⇄中国語	「日中翻訳技法」「翻訳と解釈」	17
	18. 日本語⇄ドイツ語	「ドイツ語応用」「翻訳実践研究」	6
	19. 日本語⇄フランス語	「翻訳フランス語文法」「翻訳と異文化間交流」	12
	20. その他(西・露・葡・伊)	「英仏翻訳演習」「スペイン語翻訳演習」	9
その他 7%	21. 専門演習・ゼミナール	「コミュニケーション演習」「翻訳文化演習」	17
	22. 研究・論文指導	「特別演習」「卒業翻訳」	11

(N=395)

ただし多くの授業はそれぞれ完全に区分できるわけではなく、学術・講義型に分類されていても受講生による演習を課す授業、実技・演習型においても授業時間内においては各種の講義を行う授業など、複数の要素を含んだ授業は多い。そのような場合は、当該授業の目標を基準にして種別を分類した。たとえば、授業の目標が「翻訳の技術を通じて英文読解能力及び日本語力の向上を目指す」であれば実技・演習型に、「翻訳という行為について理解を深める」のであれば学術・講義系に振り分けた。ひとつの授業内で翻訳と通訳両方を扱う科目については、実践・演習型においては授業内容が明確に異なるので別個の分類としたが、学術・講義型では「訳す」という行為自体が考察の対象となるため、区分しないで分類した。

## 4.2 学術・講義型の分類

学術・講義型は主にその講義内容によって7つに分類した。授業形態の分類と同じように複数の要素を扱っている場合が多いが、授業目標や扱う度合いによって区分した。扱われる事例・研究は日本語と英語が大半を占めており、一部フランス語やドイツ語の文献を扱う科目もあるが、言語能力で履修を制限していることは少ない。

### 4.2.1 概論・概説

その他の分類(2~7)の分野も含む、様々なトピックを1~2回ずつ広範に扱っており、重視して扱う分野のない20科目を振り分けた。通訳と翻訳の違いや、様々な種類の翻訳についての紹介など入門的要素に特化した科目もあり、その場合はさらに発展的な科目が用意されていることが多い。

参考例(一部抜粋): 本講義では、英語と日本語との間の翻訳事情について、その歴史と文化を概観することを目標とする。[...]もの名前や概念、ことわざや言い回し、広告のキャッチコピー、小説や映画のタイトル、小説や詩などの文学作品、映画の字幕、音楽の歌詞など、なるべく多くの題材を扱うことで、私たちの身のまわりにあふれている翻訳語と翻訳事情を再確認する機会としたい。

### 4.2.2 翻訳文学・文化論／比較文化・文学

翻訳とそれがもたらしてきた文化の変容を、特定の作品やその翻訳の時代背景を踏まえて考察する科目を振り分けた。学術・講義型の科目の中で29科目と最も数が多かったのは、翻訳を直接取り扱う学会などが存在しないという状況にあっても、比較文化・文学の分野では翻訳を学術的に研究してきたことが理由として挙げられるだろう。

参考例(一部抜粋): 近代における古典文学のありようと翻訳が果たしてきた功罪について考察する。研究論考を読むことに加え、作品を個別に取り上げ、その作品固有の歴史や翻訳の特色などを分析することを通して、古典文学と翻訳との関わり合いについてより具体的な観点からの検討を行いたい。

#### 4.2.3 翻訳比較・翻訳批評

既存の翻訳と新たに出版された新訳や原著との比較や分析、批評を行うことを中心とした講義で、7科目が該当した。便宜上学術・講義型に区分しているが、実際の比較や批評は学生が課題として行う場合が多い。ただし、学生が各自翻訳を行い、その後各々の作品をピアレビューする科目はこちらには含めず、実技型にまとめた。

参考例(一部抜粋): いくつかの訳例を取り上げ、注目すべき点は何か、正確さ、忠実さ、読者対象はどれか、訳語の選択は適切か、訳語の時代性などについてディスカッションし、翻訳に対する批評眼を養う。

#### 4.2.4 翻訳研究全般

翻訳の体系的な研究としての Translation Studies を、特定の分野に偏らず全般的に扱っている14の講義を区分した。

参考例(一部抜粋): トランスレーション・スタディーズ入門—現代社会にはいたるところに「翻訳」がある。[...]本コースでは、翻訳とはどのような言語行為であるのか、また各コミュニティの文化をどのように映し出しているのか、「翻訳する」ということのプロセスと「翻訳テキスト」という生産物の両方を、いろいろな角度から考察する。

#### 4.2.5 翻訳理論

等価性、規範、翻訳と解釈などの翻訳研究における個別理論や日英対照言語学など翻訳の理論面に特化した21科目を振り分けた。なお、訳出技法の説明や文法・構文の解説を「理論」とするシラバスもある。アンケート調査では設問において理論の定義をしなかったが、実践が主軸の科目は、本稿ではこの分類には含めていない。

参考例(一部抜粋): 現代における翻訳理論の全体像を俯瞰的に把握する。[...]1980年代以降の新しい翻訳理論が、1960年代までの「意味の等価」という公式をどのようにして克服し、文化的枠組みのなかで機能する翻訳理論へと発展させていったか、そのプロセスについて概観する。

#### 4.2.6 異文化コミュニケーションとしての翻訳論

翻訳を異文化理解の手段であると明確に位置付けた上で講義を行っている科目を指す。2の翻訳文化論などとの区別が難しい部分もあるが、日本近代文学など特定の時代やジャンルでなく、文化の相対性や意味の等価性など文化人類学的な枠組みを重視している7科目をこちらに振り分けた。

参考例(一部抜粋): 現代社会における異文化コミュニケーションの意義をあきらかにし、文化の相

互理解における問題点を理解する。その一例として、翻訳をとりあげ、意志疎通を行ううえで、文化の違いが言語レベルでいかにして現れ、その結果どのような問題が生じるのかを考える。

#### 4.2.7 その他

上記 6 区分に当てはめることが出来ない特殊な分野を扱う 6 科目をここに振り分けた。機械翻訳（本調査の基準に合わせ、工学系に特化していないものに限定）、聖書翻訳や仏典翻訳の研究、翻訳を言語教育に応用する手法の研究などの科目である。

参考例（一部抜粋）： 言語教育における翻訳の役割—特に成人してから英語習得を促進するための手だてとして、翻訳をいかに活用するかに焦点を当てる。

### 4.3 実践・演習型の分類

科目の性質上、学術・講義型と比して区分のつきやすい科目が多かった。言語の種類及び翻訳の媒体によって区分した。実践・演習型の科目は大半が学部専門科目として開講されており、外国語学部等の該当する言語学科で開設されていることが多い。

#### 4.3.1 英語-日本語間の翻訳

実践型の授業で中心となるのは日本語-英語間の翻訳で、169 科目が該当した。最も多いのは英語から日本語への訳出を扱う科目群（127 科目）である。翻訳のジャンルを文芸（特に小説）に限定しているもの（48 科目）と、エッセイや雑誌、新聞記事、映像など 2 種以上の媒体を扱っているもの（79 科目）とに区分した。文芸翻訳では特定の英米小説を 1 年間かけて翻訳しているものから、複数の作品を部分ごとに扱うものまで様々であった。日本語から英語への翻訳は絶対数が少なく（26 科目）、英日翻訳と同学期に対になる形で開講されている場合が多い。ひとつの授業の中で日英・英日両方を扱う科目は 16 科目で、その全てが通年制の授業であった。

#### 4.3.2 メディア翻訳

映像翻訳や芝居の翻訳、歌詞の翻訳など特殊な媒体の翻訳を扱う科目をメディア翻訳としてまとめた（23 科目）。言語はほとんどが日本語-英語間であり、中でも英日に特化していた。英語以外の組み合わせは中国語がわずかに見られた程度である。

媒体の内訳は映像翻訳、特に字幕翻訳が中心を占めており、芝居・歌詞の翻訳はごくわずかである。ただし、学術・講義型の概論・概説系科目（4.2.1）で、部分的に扱うケースがあった。

#### 4.3.3 通訳との合同授業

翻訳と通訳の両方の演習をひとつの授業内で取り扱うものをまとめた（17 科目）。

この分類の科目が開設されている場合は関連・発展科目がなく単独で開設されている場合がほとんどである。ただし、内容的には通訳演習が中心になっていることが多い。

#### 4.3.4 諸言語の翻訳

圧倒的に数の多い日本語-英語を除けば昨今の需要が高い中国語、次いで大学の伝統的な第二外国語であるフランス語、ドイツ語が並ぶ。その他の言語では数は非常に少ないが、スペイン(イスパニア)語、イタリア語、ロシア語、ポルトガル語の翻訳演習も開講されている。

#### 4.4 その他

専門演習・ゼミナール型は内容的には講義と実践の折衷型がほとんどであり、上述の2型とシラバス上での差異が顕在化するわけではないが、教育課程上の中核で翻訳・翻訳研究を扱っているケースとして区別した。翻訳論・翻訳研究を専門分野とする専任教員が担当していることが多く、同じ教員によって学部、博士前期、後期の各課程において論文指導・研究指導が多く実施されていることも特筆に価する。

### 5. まとめ

本稿ではシラバスから得られる多くの情報のうち講義内容のみを対象にした。またその分類の手法についても不十分なところがあるが、日本の高等教育機関における翻訳教育の内容が、非常な多様性をもっている実態は容易にみてとれる。諸外国においては翻訳・通訳教育に関する多数の研究結果が既に著されており、近年では教育面に特化した研究誌も創刊されているが、他方わが国では、その内容や目標、教材、手法を検討したり、情報を共有する場が極めて限られている。

孤軍奮闘している現場の担当教員は、日々の授業を通じて各種の課題を抱えていると思われる。本プロジェクトの結果を礎に、日本の大学・大学院における翻訳教育とその研究・検証をおこなう環境が整えられてゆくことを期待する。

#### 【註】

- 1) シラバスとは本来、担当講師が初回授業にあたって受講学生にのみ配布する詳細な授業計画であり、学生が受講選択の際に参考とするために用いる講義要綱とは性質が異なる。しかし、現状ではこの2種は混同されており、また大学によっては講義内容、講義概要と称するなど名称も多様である。本研究においても混乱を避けるため、「シラバス」で統一する。
- 2) たとえば、教育方法ナショナルセンター[<http://www.nicer.go.jp/>]など。しかしながら網羅的でなく、最新年度へのアップデートもされていない。



---

著者紹介：茨田英智（BARADA Hidetomo） 青山学院大学文学部英米文学科学部生（調査当時）。  
翻訳研究と高等教育論に関心を持ち、今回のプロジェクトには卒業論文執筆の一環として参画。  
連絡先：h.barada@gmail.com

---

【参考文献】

- 井田正明ほか (2005) 「シラバスデータベースシステムの構築と専門教育課程の比較分析への応用」  
『大学評価・学位研究』第2号: 87-97
- 稲生衣代, 染谷泰正 (2005) 「通訳教育の新しいパラダイム—異文化コミュニケーションの視点に立  
った通訳教育のための試論」『通訳研究』第5号: 73-109
- 杉谷祐美子 (2005) 「大学管理職から見た初年時教育への期待と評価」『大学教育学会誌』第26巻  
1号: 29-36
- 奈良雅之 (1997) 「私立短期大学における教養ゼミの現状について—履修要綱、シラバスから—」  
『大学教育学会誌』第19巻2号: 109-114
- 染谷泰正ほか (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第5号:  
285-310

